

原文

絶対王政について誤解するおそれのある表現である。

市民階級の成長

16～17世紀ごろ、イギリスやフランスをはじめヨーロッパ諸国では、東インド会社を

中心に、大商人による商業や貿易がさかんになっていた。そうした活動を通じて、海外進出も進み、資本をもつ商工業者(市民)の力も強まった。国王も海外貿易による利益で権力を強めたが、やがて重税を課したり、市民の自由な活動を^{おさげ}圧迫したりする絶対王政が広がった。

<番号24との関連で注①は削除し、これとの関連で以下を訂正>

p134 のL9 の②を①に、
L13の③を②とする。また
p135 のL11の④を③に、
L19の⑤を④とする。

修正文

<枠の罫線変更なし>

市民階級の成長

16～18世紀のヨーロッパ諸国では、貴族の力がおとろえ、国王に権力が集中した。また新航路の発展によって海外貿易が発展すると、国王は大商人に特権をあたえ保護した。こうして得た利益で、国王は政治の組織や軍隊をととのえた。このような強力な王政を絶対王政という。その一方で国王は、議会を無視して重税を課し、外国との戦争をくり返し、市民の自由な活動を圧迫するようになった。